

令和5（2023）年度

# 俳句講座 句集

— 第4集 —

講師 倉科繁登先生

（長野県俳人協会顧問）

塩尻市中央公民館

## 目次

|        |    |       |    |
|--------|----|-------|----|
| 雪解川    | …… | 清水 勝子 | 1  |
| 辰の春    | …… | 和 美   | 3  |
| 春キャベツ  | …… | 山崎 政子 | 5  |
| 冬の星    | …… | 五条 さと | 7  |
| 炬燵猫    | …… | 塩原 しほ | 9  |
| 桃の花    | …… | 杉原 宮子 | 11 |
| 鈴 蘭    | …… | 掛橋 庸子 | 13 |
| はこべ    | …… | かやの   | 15 |
| 落の臺    | …… | 土屋 敏弘 | 17 |
| 土だるま   | …… | 青柳 信雄 | 19 |
| 初紅葉    | …… | 檸檬    | 21 |
| 祭 笛    | …… | 長 泰裕  | 23 |
| 風の町    | …… | 中島 ゆき | 25 |
| 風光る    | …… | 成瀬 綾子 | 27 |
| 八十歳の証し | …… | 飯田 正孝 | 29 |
| 手習ひ    | …… | カツヒコ  | 30 |

# 雪解川

その一

清水勝子

くれなるの水のこぼるる雪解川

炎のごとく風に崩るる落椿

青葉して風の集まる観世音

天守閣くくる蜘蛛の囲たはみけり

秋思あり雲の低きに列車音

# 雪解川

その二

清水勝子

大空に落葉掃きをり僧一人

胸底にあるもの吐きし稲光り

初日の出千の足跡連れて来し

寒の月頭低めてくぐりけり

冴返る光りに乱れありにけり

# 辰の春

その一

和美

老いといふ流れを任す辰の春

櫛の木の鼓動確かや木の根開く

残花なほ風の行方を追ひかけて

一色を極めて清しあやめかな

被爆者の声を掻きけすあおあらし

# 辰の春

その二

和美

靴に泥しっかり付けて落ひとつ

そつと目を開けて伺ふ冬木の芽

貪欲に生きし巨匠や春を逝く

甲斐性のなき人と来て雪椿

またひとつ馬齢重ねて屠蘇を酌む

# 春キヤベツ

その一

山崎政子

春風やビニール袋遊ばせて

霜予報取り込む鉢の重さかな

木曾の地に響く四股の音青葉風

救急車駆けづり回る猛暑かな

処理水や涙となりて秋の海

# 春キヤベツ

その二

山崎政子

コスモスの波に揺らるる父と子と

石榴の実鬼の口から吾の口へ

冬富士の内に秘めたるマグマかな

重き戸や風尖らせて寒に入る

春キヤベツ刻む音軽きパシユパシユパ

# 冬の星

その一

五条さと

風うたひ片栗の花揺れにけり

春風や少年の夢海を越ゆ

ホトトギス広島の声囀りぬ

夕立や些事煩惱を流したる

松葉杖置きて秋の日惜しみけり

# 冬の星

その二

五条さと

風や苦難の民に道与へん

差し入れの本に隠れし白堊

沈丁花夜の静寂を漂ひて

齡経て我見つけたり初鏡

冬の星今日一日の我包む

# 炬燵猫

その一

塩原しほ

霧氷林天地の音を用じこめて

初寝覚吾の文集の出来上がる

団欒のいつも真中炬燵猫

雪解水ポツタリポタポタ日もすがら

春寒や日本どこに向ふのか

# 炬燵猫

その二

塩原しほ

沈丁花蕾に紅の立ち上る

菜の花や安政四年の道祖神

風澄みぬまほらの国の畑を打つ

亡き父は反戦の人 広島忌

夜の更けて銀杏降れる音の有り

# 桃の花

その一

杉原宮子

手を合わす明るく楽しく福寿草

桃の花ひな様びつくり雪の花

バラの花棘に守られ王女様

菖蒲湯につかりて体元気なれ

日が落ちて水まき後の夕涼み

# 桃の花

その二

杉原宮子

虫が鳴く秋の気配を待つもみじ

骨休め落葉浮かんだ露天風呂

墓まいり花はなけれど落葉あり

バラ色の人生だったか胸に問う

外は雪家は花咲く鈴鈴鈴  
なか

# 鈴蘭

その一

掛橋庸子

薔薇の名のひとつひとつの物語

鈴蘭の真白き命根を張りぬ

蜘蛛の囲の真ん中にいる孤独かな

朝涼の一枚の葉の重みなり

石ころも動き出したる暑さかな

# 鈴蘭

その二

掛橋庸子

台風の大なる物過ぎてゆく

弱雲吞み込むほどの深呼吸

風吹きて右往左往のすすきかな

初空や見慣れし山の青きなり

冬ぬくし笑い合いたる布地藏

# 福寿草

その一

かやの

アイロンのごときにはいや炎暑の日

炎暑なり庭に立つ我影もなし

雲のごと雀らのつて黍あらし

軽トラにびくひっかけて紅葉山

ごごの上十二単の柿落葉

# 福寿草

その二

かやの

水がふと温かきかな冬の朝

雪折れの杉の香や裏の山

常念と青空バックに風あがる

寒の明け三婆々茶会苗ハウス

孫まきし豆ふくらめり雨水かな

# 落の臺

その一

土屋敏弘

照り返す湖の光や落の臺

沈丁の花下に遊べる矮鶏つがひ

初夏の街湧水巡り一日暮れ

魚跳ねる炎暑の匂ふ運河かな

台風去る水退く道に魚跳ねる

# 落の臺

その二

土屋敏弘

トンネルの闇の入り口 蔦紅葉

湖に出る水路一本 菱紅葉

縄電車落葉の駅で 園児降り

鮎市や大綱引きの関の声

夜半に過ぐ貨物列車の音 寒し

# 土だるま

その一

青柳信雄

齡積み安否確かむ年賀状

初詣足らぬ釣銭お賽銭

春の雪針葉樹に咲く白い花

砂嵐茶色くかすむ我が家なり

ヤゴ見つけ何度もシヤッター切る子らよ

# 土だるま

その二

青柳信雄

蜘蛛の囲や電線に張る幾何模様

外遊び五分で戻る大暑かな

夜半の夏響くカラオケ四年ぶり

紅葉狩り孫の手の中赤照らし

初雪や子らが朝から土だるま

# 初紅葉

その一

檸檬

疎群来七十年の時を経て

人生無計画墓石に霜の花

襟立てて修司の街は冬ざるる

早春の風折り返す万歩計

風光るカヌー競技の声満ちて

# 初紅葉

その二

檸檬

沖縄忌家族写真に日傘さす

青空を飲み干してみむソーダ水

ひらがなの葉書に泳ぐ金魚かな

天高く移動図書館椅子二つ

雄弁な夫の山靴初紅葉

# 祭笛

その一

長泰裕

雲ちぎれ紋白蝶の舞ひきたり

葉脈の影やわらかし五月空

麓より風にかすかや祭笛

土ぼこり立ててひとつぶ喜雨来る

落日の山河に解くる暑さかな

# 祭笛

その二

長泰裕

しかたなく我に止まれり赤とんぼ

開催の号砲五発天高し

風に浮く綿虫北の匂ひせり

老いといふ冒険の旅冬北斗

指先を逃げる釣銭年の暮

# 風の町

その一

中島ゆき

川跨ぐ水恋しかろ鯉のぼり

けし赤く夫の余命を聞きし朝

制服の翻る裾夏日陰

朝顔は雑草と化す今ははや

枹の実を蹴って行く子の長き影

# 風の町

その二

中島ゆき

路地裏の落葉のロンド風の街

気まぐれにおいでおいでと枯芒

浅き春母に贈りし「モジリアニ」

店先のねりきり淡き春の色

東風吹くも時の止りし能登の海

# 風光る

その一

成瀬綾子

暑の中の四年ぶりなりクラス会

小春日や上野駅にて母を想う

手をかざすストーブ列車の五能線

天の川揺らぐ平和に祖父祈る

秋晴れや三世代集ふ参観日

# 風光る

その二

成瀬綾子

風光る吾子旅立ちの後押しす

切り株や生きし証の五月来る

畦道に役者が揃ふ群あやめ

菖蒲湯や鼻歌吾子の声変わり

吾子の手や蜘蛛の巣模様レース編み

# 八十歳の証し

その一

飯田正孝

泥つけて畑あがれば春の風

百万本のバラ咲く里で眠りたい

走り梅雨別れの旅についてくる

ここからはわが結界と蜘蛛の糸

きらきらと水玉連ね蜘蛛ひそむ

# 八十歳の証し

その二

飯田正孝

台風去り戸を開け広げ爪を切る

ゆるゆると紅葉流れる木曾の谷

音を消しひたすら積る里の雪

寒入りの朝餉の温み能登思ふ

沈丁花今年も咲くか能登半島

# 手習ひ

その一

カツヒコ

柳川や白秋しのぶ水あそび

耳癢ひてかはづ静けし田に夕陽

暑気払ひ仲間にぎはふ地下の町

落葉してこもれ陽まぶし山湯かな

北アルプス山並み澄めり雪見月

# 手習ひ

その二

カツヒコ

初釜や見合ひの場とはつゆ知らず

訃報きてなほ賀状あり白寿より

混み合ひて寒さ忘るる渡月橋

大寒や能登人のこと思ふ日々

猫よりもトイレに行きし余寒かな

おわりに

塩尻市中央公民館俳句講座の句集第四集ができあがりました。一年間の講座のまとめとしての句集です。

私は、今回初めて俳句にチャレンジしました。文語と口語の違いや仮名遣い、季語のこと等の基本をはじめ、光景が見えるようにする、他人に感じてもらうようにする、説明的にならないようにするなど、進歩するための手だてを学ぶことができました。また、受講生の皆様の句に接し、「こんな句を作れるようになりたいな」という憧れをもちました。

受講生の皆様の足跡をしっかりと残すとともに、お互いに学び合いながら新たな一歩を踏み出す、そんな句集になればと願っています。

本講座の講師、倉科繁登先生には一句一句について丁寧にご指導いただきました。その成果がこの句集に集約されています。この場をお借りして感謝申し上げます。

令和 六年 三月

塩尻市中央公民館長 青柳信雄

## 俳句講座句集 (令和5年度)

### 第4集

令和6年3月31日 発行